

大学の学び

グローバルな視点でのフィールドワークで、 問題発見・解決能力を身につける

同志社大学 政策学部 政策学科
岡本ゼミ

この学びに関する
他のSDGsの目標



社会問題の解決方法を 分野を横断して学ぶ

同志社大学政策学部政策学科は、高度な問題発見・解決能力を身につけ、地域や組織で活躍するリーダーの育成を目指している。同学科3年の小橋杏実こはし あみさんは、入学の動機を次のように話す。

「私は、高校時代から環境問題や

私たちが紹介します



政策学部政策学科
3年
小橋杏実
こはし・あみ
京都府・私立同志社国際
中学校・高校卒業。



政策学部政策学科
3年
山本大喜
やまもと・たいき
三重県立川越高校卒業。

SDGs に関心があり、それらの社会問題を解決するためのアプローチ方法を学びたいと考え、本学部を志望しました」

1年次の必修科目「First Year Experience」では、大学の学習に必要な知識・技能を、1クラス15人程度の少人数で学ぶ。同学科3年の山本大喜やまもと たいきさんは、岡本由美子教授が担当するクラスで学んだ。

「私が中学校時代を過ごしたシンガポールは、高級マンションが立ち並び一方で、貧しい労働者を見かけることも多かったことから、貧富の差について問題意識を持つようになり、大学に入ったら国際的な社会問題の解決に取り組みたいと思っていました。岡本教授のクラスで、ウガンダなどの途上国について学び、持続可能な開発に関心を持ちました」

1年次秋学期から2年次春学期にかけても、少人数制の科目「アカデミック・スキル」が設置されている。

文献講読のスキルやデータ収集・分析の方法など、大学での学習や研究に必要な技能を身につける。同時に2年次からは、政治・行政、法律、経済、国際社会などの広範な専門科目を履修し、分野を横断して学ぶことができる。

国内外のフィールドワークで 現場主義を体感

2年次秋学期からはゼミが始まる。小橋さんと山本さんは、岡本教授のゼミに所属。同ゼミでは、「グローバル社会は持続可能か」をテーマに掲げ、「目標8 働きがいも経済成長も」の実現を目指し、実践的

な国際開発・協力のあり方を研究している。学びの特徴は、問題発見・解決能力の育成を目指し、フィールドワーク（以下、FW）を複数回実施することだ。2年次は国内でFWを行い、そこで得た知見を3年次の海外FWで生かしていくことで、グローバル（*1）な視点も身につけていく。

この1年間は、コロナ禍の影響でFWの内容をオンラインで実施した。まず、2020年3月には国内FWとして、徳島県勝浦郡上勝町かみかつこうのオンライン視察を実施。同町は、南天や紅葉など、日本料理を彩る「つまもの」を、栽培・出荷・販売するビジネスで注目を集める地域だ。「商品である『つまもの』は軽く、女性や高齢者でも扱いやすいのが特徴です。このビジネスの成功で、同

*1 地球規模（グローバル）の視野で物事を考え、必要に応じて地域視点（ローカル）で行動すること。

町では女性や高齢者の就業率が上がり、収入が増えました。そうした取り組みが途上国の開発に役立てられないかという視点で視察を行いました」(山本さん)

同年9月には、オンラインでの聞き取り調査を、ウガンダの大学や政府関連機関などに対して行った。フェアトレード(※2)に関心があった山本さんは、ウガンダ東部のコーヒートの小規模農家組合の幹部役員に話を聞いた。組合は、質のよいコーヒを生産することで経済的自立を目指しているが(目標1)、日本の食品規格である有機JASの認証取得に苦戦。話を聞くと、認証の取得が遅れている原因は、主に組合スタッフのミスだと分かった。

「私たちは、ミスを減らす仕組み

ウガンダの小規模農家組合への提案書

3.ジェンダーに関して



ジェンダー格差を是正するための啓蒙活動を行い、女性農家を全体の40%に引き上げる案を提示。

に加え、女性農家の自立も課題だったため、上勝町の例を参考に、女性の活用(目標5)を提案しました(図)(山本さん)

小橋さんは、ウガンダへの国際協力プロジェクト班に所属。コロナ禍がウガンダの経済に与えた影響について調べ、オンラインでJICA職員に聞き取り調査を実施した。それらを基に、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぎながら経済活動や教育を行う方法について仮説を立て、現地の大学教員などに提案(目標17)。仮説の立案では、岡本教授の助言を受け、現地の人たちのみで実施できる「現場主義」を大切にしました。「大学教員に、農村部の学校でのラジオ教育と分散登校を行うアイデアを提案しました(目標4)。その後ウガンダの大統領が実際にラジオ教育の実施を計画していたと聞き、提案の方向性が間違っていないかったと勇気づけられました」(小橋さん)

フィールドワークで行った提案を卒業論文で深める

現3年生は、コロナ禍が終息に向かえば、21年の夏にウガンダを訪れ、



写真 昨年度のゼミ生がウガンダのマケレレ大学を訪問した際の様子。学生はアフリカの大自然や現地の人と触れ合い、本当の幸せや持続可能な開発とは何かを考えた。

FWを行い、そこでの調査も踏まえ卒業論文を作成する予定だ。山本さんは、オンライン調査でまとめたコーヒー組合への提案を自らの手で実現させたいと話す。小橋さんは、ウガンダの大学で学生や先生と議論したいと意欲を語った(写真)。

「ラジオ教育は実現可能なのか、実現できるならば課題は何かを、現地の大学生と議論し、私の卒業論文のテーマにしようと考えています」
同ゼミ生の卒業後の進路は、多様でありつつも、問題解決能力を生かせる職業を希望する学生が多い。

「ウェブデザインなど、クリエイティブな仕事でクライアントの問題解決に貢献したいです」(小橋さん)
「生活基盤を担う企業など、SDGS達成に貢献できる企業に就職を希望しています」(山本さん)

学びとSDGs

分野横断的な目標の達成に貢献できる人材を育成



政策学部 教授
岡本由美子
おかもと・ゆみこ

政策学部では、SDGsのように分野横断的な目標の達成に貢献できる人材の育成を目指しています。そのため、1年次から、少人数の授業において問題解決型学習を実施するとともに、社会科学分野を横断的に学べるカリキュラムとしているのが特徴です。

ゼミで実施する海外FWのテーマは毎年異なりますが、20年度は、「ウガンダにおけるSDGs達成に与えたコロナの影響」「コーヒー産業の課題」「エコツーリズム」「JICAが実施する北部ウガンダ生計向上支援プロジェクトの評価」の4つの研究を進めました。初めてのオンライン調査では、想定していた以上に議論が深まりました。もちろん、現地に赴き、持続可能な開発とは何かを感じることが重要であり、今後も実施予定です。高校生には、飢餓問題など、海外で起きている問題も日本に深いかかわりがあることを知り、自分の行動が解決につながるという自覚を持って、学びを深めてほしいと思います。また、ボランティアなどの社会貢献活動にも参加し、視野を広げてから進学してほしいです。

* 2 開発途上地域の農家などの生産者が作る農作物や商品を、公平・公正な価格で継続的に購入し、生産者の自立を支援する貿易の仕組み。